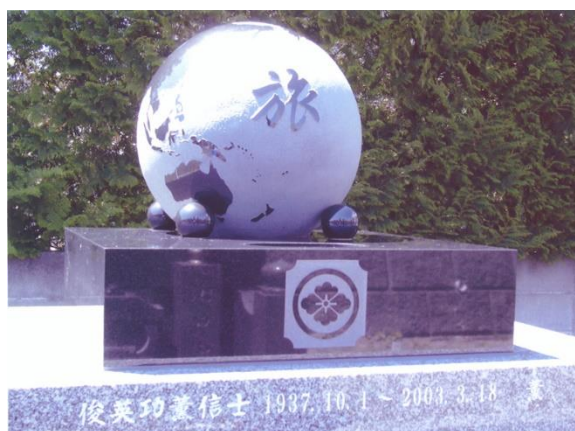


丸い丸い球状のお墓

第 10 回で特別賞に選ばれた静岡県駿東郡の三澤 みどりさんのお墓は、亡夫のために建立した地球儀に「旅」の文字入りお墓。遺書に描かれていた亡き人の墓石デザインを忠実に再現したもの。旅が好きだった人が、あの世でも世界中を自由に飛び回れるようにと、太平洋上に「旅」の一文字を配した地球儀で製作してある。あの世でも自由に、生き生きと旅を楽しんでいるのだらうと三澤さん。



同じく第 10 回で入賞した福岡県北九州市小倉北区の林 風与子さん（当時 54 歳）のお墓は、球体に ありがとう 感謝型お墓。「〇〇家のお墓」ではなくて、“自分のお墓を建てたい！”と墓地を購入したのが 8 年前。以来構想を練った。墓石に示す言葉は「ありがとう」（※お参りにきてくれてありがとう…から）と決めていたものの、墓石や全体のイメージがまとまらず…。去年のお正月、熊本県の阿蘇で満月に見とれ、ピッピーとひらめいたのが「丸」。太陽も地球も丸。そして“物事が全て丸〜くおさまりますように”



という願いも込めて丸いお墓（下は蓮の葉）にしました。墓誌には“お星様になった”という思いで。最初に示している「心開成」は水子地蔵さんの名前でもあり、私の子孫へ。“ありがとう”の感謝の心と共に『心を開いたら自分の思いが成る』とメッセージを残したかったのです。隣の水子地蔵さんは「虹」をイメージしました。ベンチの下は、線香、ローソクからタオル、バケツ… e t c . 物入れです。設計から、ありがとうの文字、墓石背面の建立月日「平成 15 年 10 月 10 日」も自分が書いた字を彫ってもらいました。納骨堂は広い。石屋さんに「こんなに広くていいんですか」と言われたが、「この世では小さな家にしか住めなかったが、あの世では広々としたところでゆったりとしたいんだから」といったら、クスクスと笑っていた。

第 10 回で入賞した神奈川県横浜市神奈川区の川瀬 秀美さん（当時 54 歳）のお墓は、遠くから一目でわが家のお墓とわかるように球状のお墓。

年配の者がいるので、どこに自分の家の墓があるかすぐわかるお墓を作りたいと思い、球体と指定をしました。後は営業の方と打ち合わせを繰り返し行いました。下の台は 6 角形に。受ける台座もあり、とても気に入っています。球に合わせて花立・香炉も丸くしました。



第 10 回で入賞した群馬県富岡市の五十嵐 武さん（当時 47 歳）のお墓は、まあい気持ちになれる球状のお墓。生前、本当に苦勞を重ねてきた父親。父が亡くなってから、もう苦勞をしないで心おだやかに、やすらかに休んでほしいと思いました。

そして、私たちもお参りするたびに、まあい心になれるようにと、その願いを込めて、球状の墓石にいたしました。



第 11 回で入賞した宮城県仙台市泉区の内田 浩右さん（当時 63 歳）のお墓はサッカーボール型。息子はサッカーが大好きなスポーツ少年でした。サッカーを通じ、多くの友人に恵まれ充実した学生生活だったようです。そんな息子のためにコートにサッカーボールを置いたオリジナルのお墓を作りました。このお墓の前に立つと、家族というサポーターの前でシュートを決め、満面の笑みを浮かべる息子の姿が蘇ってきます。



第14回で入賞した岐阜県瑞穂市の加納雅弘さん(当時62歳)も球形のお墓。

「ゆっくり旅ができるように…」という想いを胸に、他の墓にはないデザインで、夢や期待が感じられるように。いつもきれいな墓であるように。絵画教師であった経験を活かし、自分でデザインし、塑像用油粘土でお墓のミニチュア版を製作。石材店に依頼して完成しました。石材店は、かつての教



第15回で入賞した福島県喜多方市の片桐仁志さん(当時55歳)は、遠くの親族が集まるお彼岸などの機会も、「来てよかった」「楽しかった」の時に変えたいとの思いで、古くなったお墓の建て替えを行った。「夢」の文字を刻んだ球体の墓石は、触ったり、撫でたりして親しめるといふ。また球体に太陽が反射し、光と共に周りを映し出し、魚眼レンズのような美しい景色も感動できる。



第20回で京都府宇治市の堀侑稔(当時75歳)さんが、球型のお墓で入賞した。自身は会社勤めの傍らアマチュア野球に没頭、奥さんは卓球で国体に出場するなど実業団で活躍。息子さんは高校時代に甲子園に出場、またお孫さんは現在高校の野球部で活躍している。さらに現在は奥さんとゴルフを楽しんでいる。ボールに関わる人生を象徴、人生を角なく丸く送ることができるようにという想いを込めた。

